宇都宮市文化財表示板設置事業報告第1集

宇都宮の軌跡

―城下町宇都宮を訪ねて―



平成8年3月

宇都宮市教育委員会

目　　次

宇都宮市文化財表示板等設置計画 …… 1

文化財表示板（旧町名）の概要 …… 2

宇都宮城下図 …… 3

旧町名表示板の設置箇所 …… 4

名所・旧跡表示板の設置箇所 …… 5

旧町名表示板 …… 6

名称・旧跡表示板 …… 27

付・車両用誘導板 …… 33

例　　言

(1)　本書は、「宇都宮市文化財表示板等設置計画」に基づき実施した平成7年度（第Ⅰ期）設置事業の概要を収録したものである。

(2)　本事業に参画した課は、次のとおりである。（○は担当課）

・企画審議室　　・財政課　　・商業観光課　　・都市計画課

・街路課　　・道路維持課　　○建築課　　○文化課

(3)　本事業の基本計画及び実施設計は、㈱乃村工藝社（東京都港区芝浦4丁目－6－4）に委託した。

(4)　本事業の設置工事は、次の2社に委託した。

・㈱徳和建設（宇都宮市泉が丘5丁目7－29）

・㈱大安工業（宇都宮市緑2丁目11－11）

(5)　解説文については、文案作成を市内小中学校の社会と国語の先生に、監修を宇都宮市文化財保護審議委員会の先生に依頼した。構成は次のとおりである。

【文案作成】

真壁　敏夫（中学社会科担当・宮の原中学校）

斎藤　健児（中学国語科担当・鬼怒中学校）

清水　正幸（小学社会科担当・清原南小学校）

荻埜　晴代（小学国語科担当・簗瀬小学校）

【監　　修】

塙　　静夫（宇都宮市文化財保護審議委員会・委員長）

冨　　祐次（宇都宮市文化財保護審議委員会・副委員長）

阿部　　昭（宇都宮市文化財保護審議委員会・委員）

大嶽　浩良（宇都宮市文化財保護審議委員会・委員）

柏村　祐司（宇都宮市文化財保護審議委員会・委員）

(6)　本事業の推進にあたっては、次の各機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げる。（順不同）

・宇都宮市自治会連合会　　・関係各自治会　　・宇都宮市商工会議所　　・栃木県宇都宮土木事務所　　・栃木県道路維持課

・栃木県警察本部　　・宇都宮中央警察署　　・宇都宮南警察署

・ＮＴＴ栃木支店　　・㈱東京電力栃木支店

宇都宮市文化財表示板等設置計画

1　目的

宇都宮市の歴史や文化財を次世代に伝えるとともに、歴史の香りのする魅力ある町を創造するために、歴史性を醸しだすような文化財表示板等（サイン）を設置する。

○宇都宮市民の心に歴史を通じての郷土愛を醸成するサイン計画
○歴史・文化財の伝承に貢献するサイン計画
○魅力ある町づくりの一環となるサイン計画

2　基本方針

(1)　エリア（文化財集中地）を設定し、各文化財をつなぐストーリー性を構築する。
(2)　エリアの特徴を表すシンボルを設定し、各エリア毎に情報拠点を設置する。
(3)　文化財散策コースを設定し、マップ及び案内パンフレットを作成する。

3　活用方策

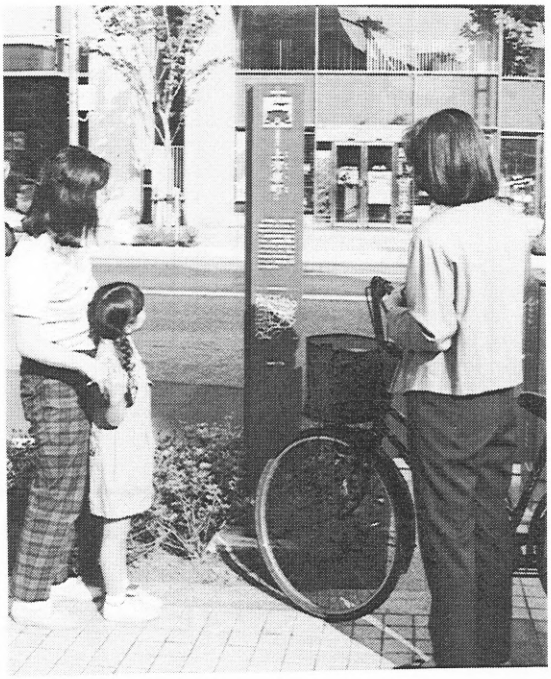
(1)　エリヤやストーリー性を生かした文化財めぐり・歩け歩け大会等の行事を企画
(2)　学校教育（遠足・社会科見学等）や地域活動での利用促進
(3)　文化財案内ボランティアの養成

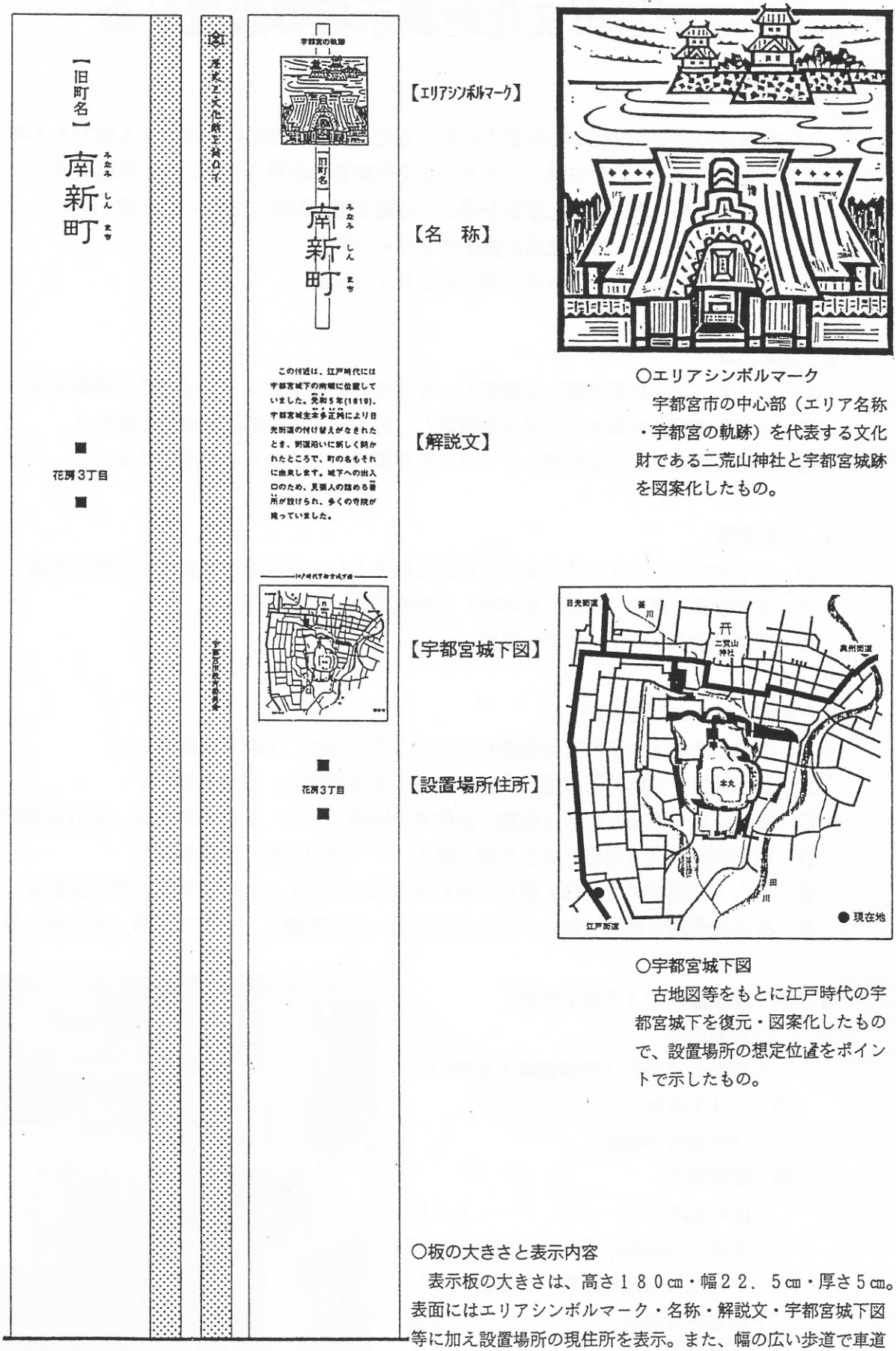
4　地区（エリア）の設定

A　市中心部地区（宇都宮の軌跡）…… 二荒山神社、宇都宮城跡等
B　大谷地区（仮称／石の里・大谷）…… 大谷磨崖仏、多気城等
C　根古谷台・市南部地区（仮称／古代史の回廊）…… 根古谷台遺跡、塚山古墳群等
D　市南東部地区（仮称／武士の夢ヶ原）…… 飛山城跡、同慶寺等
E　北山・長岡地区（仮称／歴史を育む風土と共同体）…… 古墳群、民俗芸能等
F　日光街道沿い地区（仮称／時代を刻む道・日光街道）…… 二宮堰、彫刻屋台等

5　第Ⅰ期設置事業（平成７年度）

(1)　対象地区
・市中心部地区（宇都宮城下を中心に）
(2)　エリア名称
・『宇都宮の軌跡』
(3)　設置物件
・旧町名表示板 …… ６５基
・名所・旧跡表示板 …… １６基
(4)　その他（指定史跡等への車両誘導）
・根古谷台遺跡 …… ４基
・大谷磨崖仏 …… ２基
・塚山古墳群 …… ２基





○エリアシンボルマーク

宇都宮市の中心部（エリア名称・宇都宮の軌跡）を代表する文化財である二荒山神社と宇都宮城跡を図案化したもの。

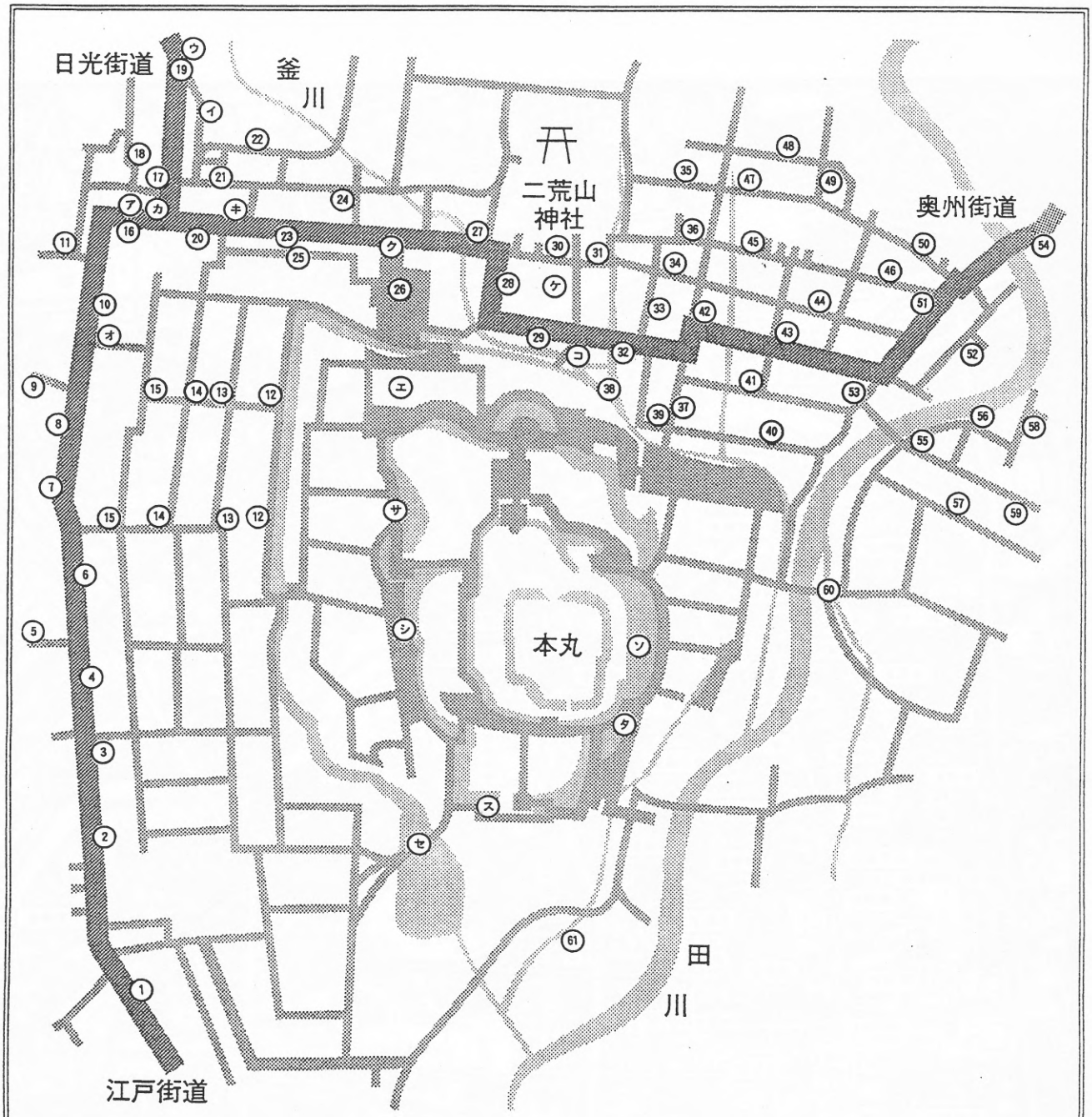
○宇都宮城下図

古地図等をもとに江戸時代の宇都宮城下を復元・図案化したもので、設置場所の想定位置をポイントで示したもの。

○板の大きさと表示内容

表示板の大きさは、高さ１８０㎝・幅２２．５㎝・厚さ５㎝。表面にはエリアシンボルマーク・名称・解説文・宇都宮城下図等に加え設置場所の現住所を表示。また、幅の広い歩道で車道沿いに設置した場合は、裏面にも名称及び現住所を表示。

文化財表示板（旧町名用）の概要



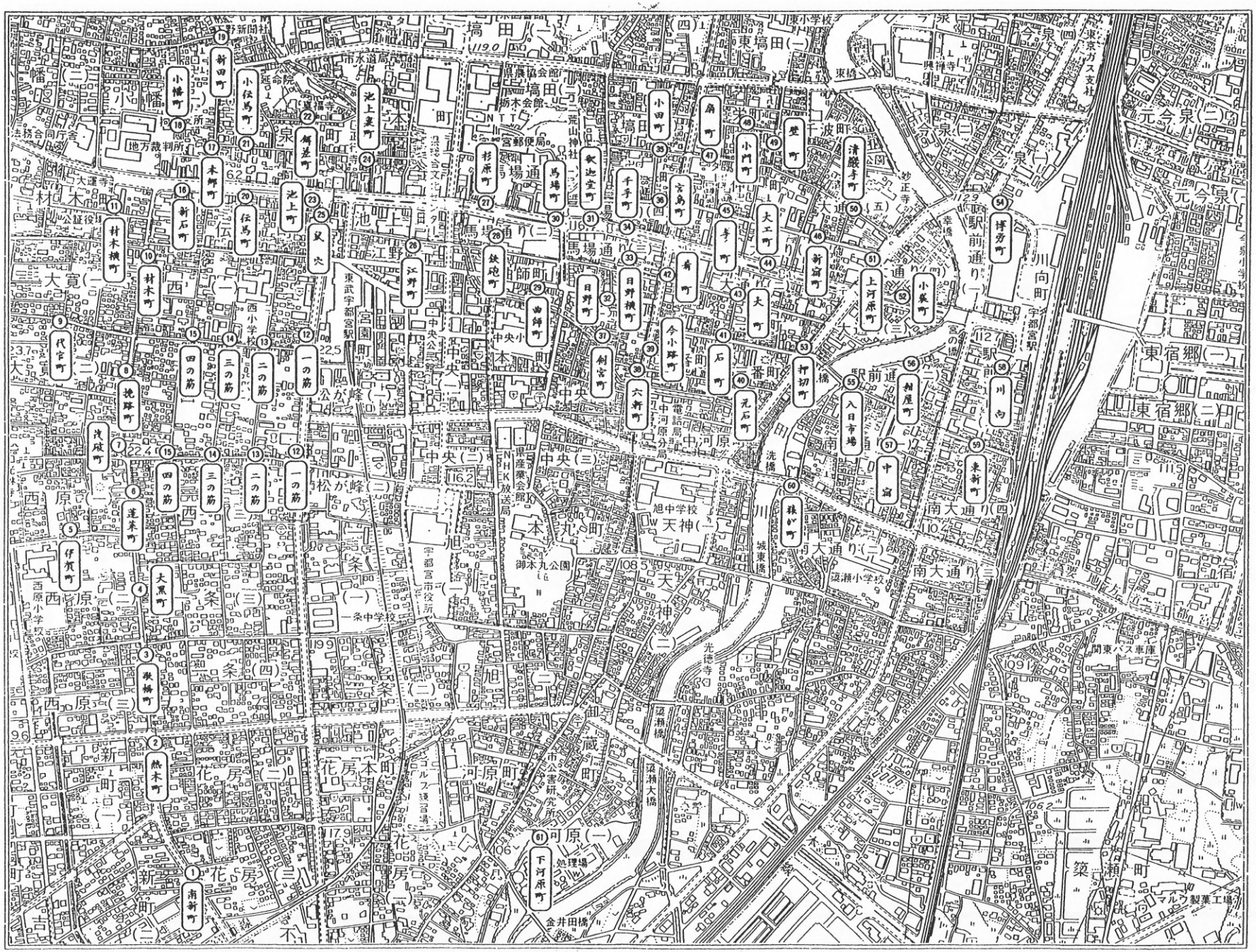
【旧町名】

① 南新町	⑫ 一の筋	㉓ 池上町	㉞ 千手町	㊺ 寺町	㊽ 紺屋町
② 熱木町	⑬ 二の筋	㉔ 池上裏町	㉟ 小田町	㊻ 新宿町	㊾ 中宿
③ 歌橋町	⑭ 三の筋	㉕ 鼠穴	㊱ 宮島町	㊼ 扇町	㊿ 川向
④ 大黒町	⑮ 四の筋	㉖ 江野町	㊲ 今小路町	㊽ 小門町	㊾ 東新町
⑤ 伊賀町	⑯ 新石町	㉗ 杉原町	㊳ 剣宮町	㊾ 壁町	㊿ 猿が町
⑥ 蓬萊町	⑰ 本郷町	㉘ 鉄砲町	㊴ 六軒町	㊿ 清巌寺町	㊿① 下河原町
⑦ 茂破町	⑱ 小幡町	㉙ 曲師町	㊵ 元石町	㊿① 上河原町	
⑧ 挽路町	⑲ 新田町	㉚ 馬場町	㊶ 石町	㊿② 小袋町	
⑨ 代官町	⑳ 伝馬町	㉛ 釈迦堂町	㊷ 肴町	㊿③ 押切町	
⑩ 材木町	㉑ 小伝馬町	㉜ 日野町	㊸ 大町	㊿④ 博労町	
⑪ 材木横町	㉒ 餌差町	㉝ 日野横町	㊹ 大工町	㊿⑤ 八日市場	

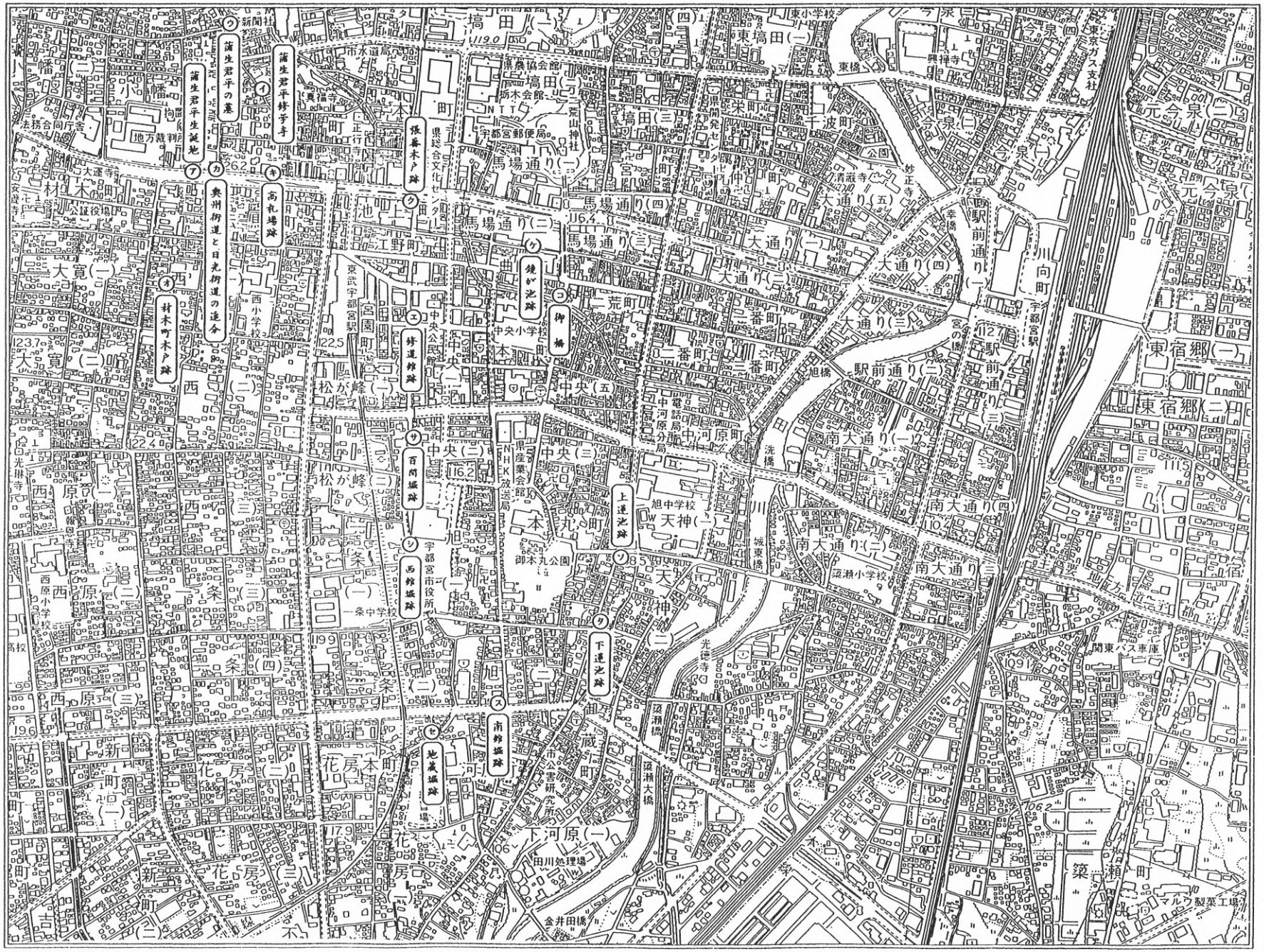
【名所・旧跡】

㋐ 蒲生君平生誕の地	㋑ 百間堀跡
㋑ 蒲生君平修学の寺	㋒ 西館堀跡
㋒ 蒲生君平の墓	㋓ 南館堀跡
㋓ 修道館跡	㋔ 地蔵堀跡
㋔ 材木町木戸跡	㋕ 上蓮池跡
㋕ 日光街道と奥州街道の追分	㋖ 下蓮池跡
㋖ 高札場跡	
㋗ 張番木戸跡	
㋘ 鏡が池	
㋙ 御橋	

宇都宮城下図

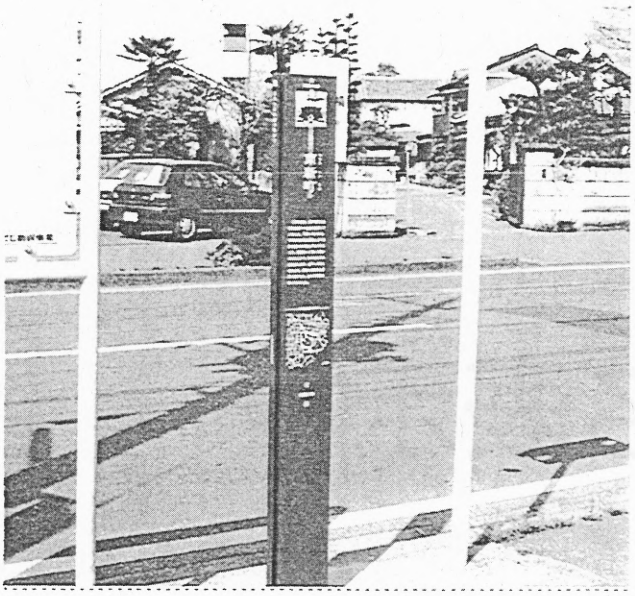


旧町名表示板の設置箇所



名所・旧跡表示板の設置箇所

旧町名表示板



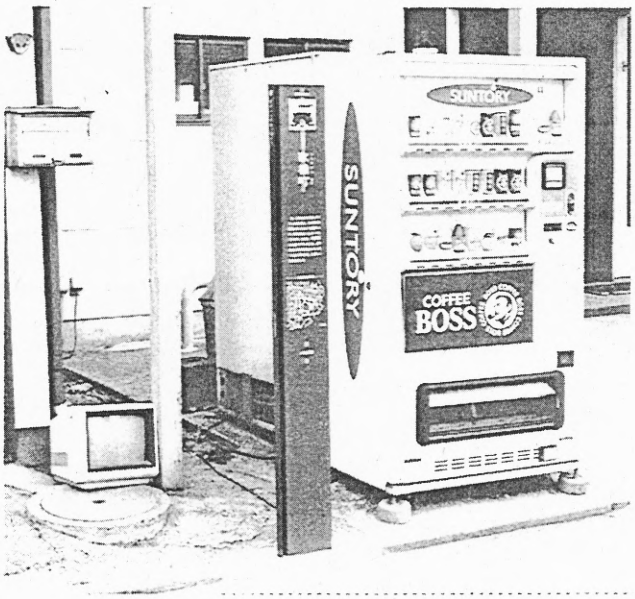
1　南新町（みなみしんまち）

この付近は、江戸時代には宇都宮城下の南端に位置していました。元和（げんな）５年（1619）、宇都宮城主本多正純（ほんだまさずみ）により日光街道の付け替えがなされたとき、街道沿いに新しく開かれたところで、町の名もそれに由来します。城下（ばんしょ）への出入口のため、見張人の詰める番所が設けられ、多くの寺院が建っていました。



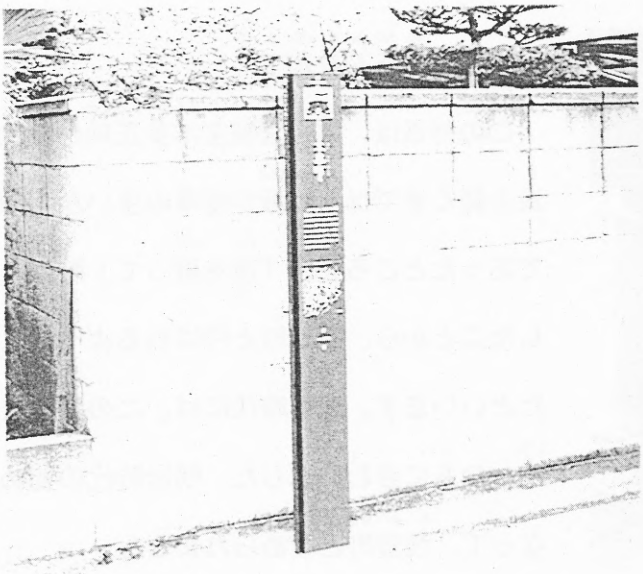
2　熱木町（ねぎまち）

この付近には、古くから不動尊（ふどうそん）が祀（まつ）られ、熱木の不動尊として親しまれていました。江戸時代以前には贄木町（にえぎまち）とも呼ばれていたようです。日光街道沿いのため、将軍日光社参（にっこうしゃさん）のときには、臨時の番所（ばんしょ）が置かれました。



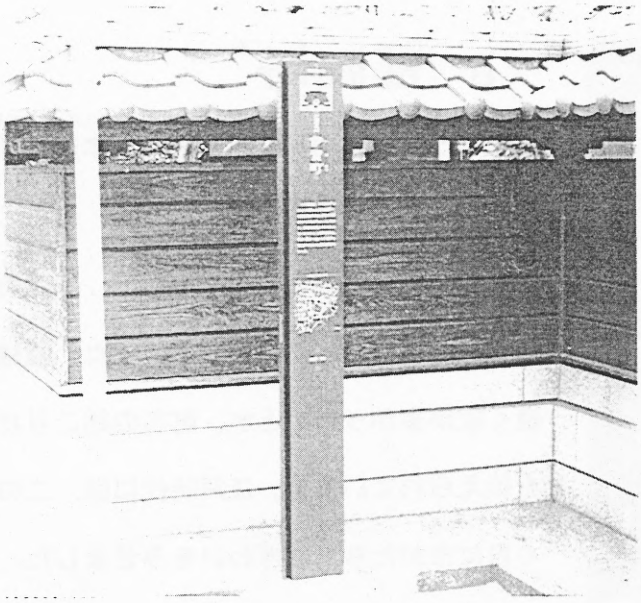
3　歌橋町（うたのはしまち）

昔、このあたりに住んでいた人が歌を詠（よ）み、その歌が万葉集（まんようしゅう）に載（の）ったという伝説により、町名が起こったといわれています。古くは、宇田橋町（うたのはしまち）とも書かれていました。江戸時代には日光街道沿いに七のつく日に市（いち）がたち、にぎわったといいます。



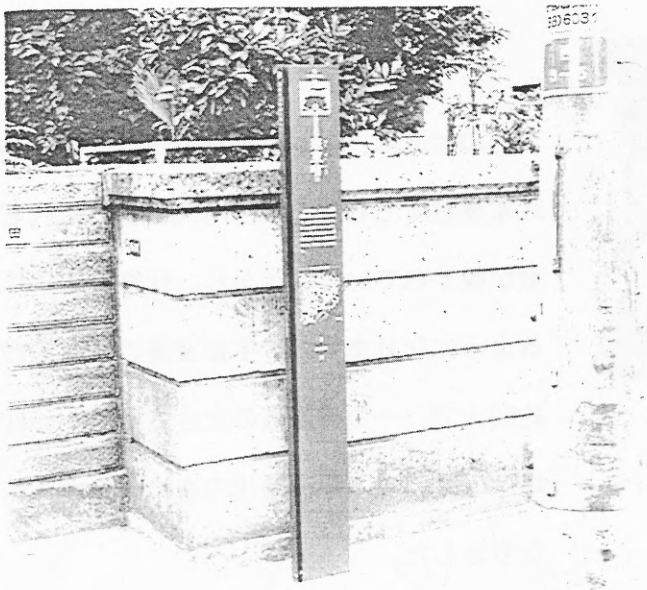
4　大黒町（だいこくちょう）

この付近に、古くから三面大黒天（さんめんだいこくてん）が祀（まつ）られていたので、大黒町と呼ばれるようになりました。江戸時代には日光街道沿いに町家が並び、宿屋が多かったといいます。また、七のつく日には市（いち）がたち、にぎわいをみせました。



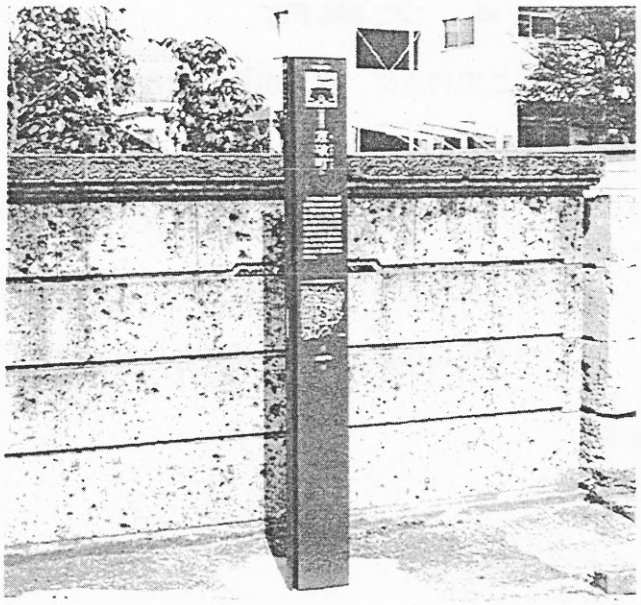
5　伊賀町（いがまち）

この付近は、宇都宮城下の西端に位置した武家屋敷町で、宇都宮氏の時代に芳賀伊賀守ゆかりの土地であったことから、伊賀町の名が付けられたといわれます。江戸時代には、楡木・栃木へ通じる六道口（ろくどうぐち）を警備する役人の屋敷が置かれました。



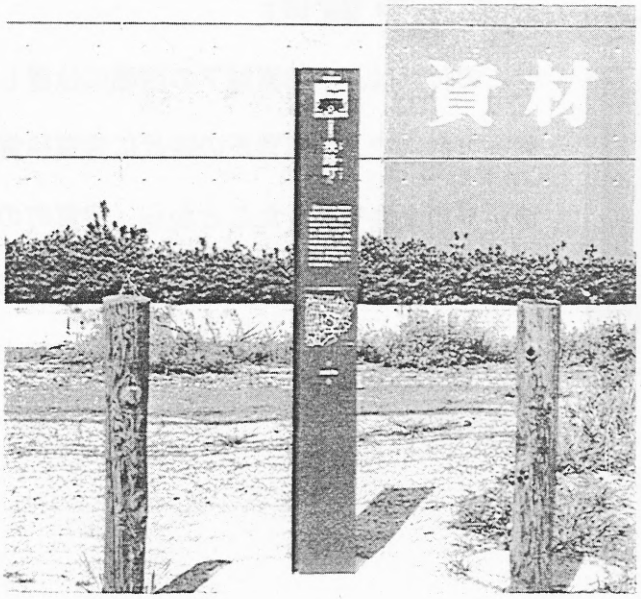
6　蓬莱町（ほうらいちょう）

この付近に、古くから蓬莱観音（ほうらいかんのん）を祀（まつ）ったお堂があったので、蓬莱町と呼ばれるようになったと伝えられています。江戸時代は日光街道沿いに町家（まちや）が並び、七のつく日には市（いち）がたち、にぎわいをみせました。



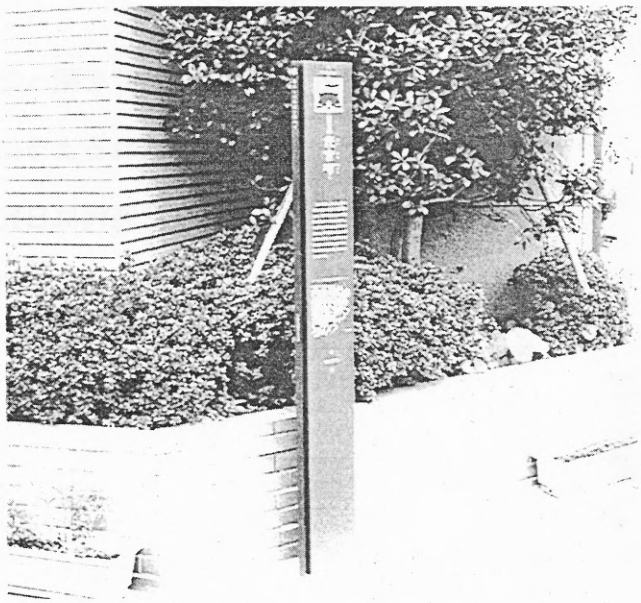
7　茂破町（もやぶりちょう）

この付近は、宇都宮城主本多正純（ほんだ まさずみ）が日光街道を開くまでは、竹藪（たけやぶ）や雑草の生い茂る原野であったところを、「茂（も）を破（やぶ）って」町づくりしたことから、茂破町と呼ばれるようになったといいます。江戸時代には、二のつく日に市（いち）がたちにぎわいました。明治時代の初めになって、茂登町（もとまち）と改められました。



8　挽路町（ひきじ ちょう）

元和（げんな）５年（1619）、宇都宮城主本多正純（ほんだ まさずみ）が日光街道の付け替えを行ったとき、付近の道を西側へ引いて町をつくったので、挽路町という名が付いたといわれます。また、轆轤（ろくろ）を挽（ひ）く家が多かったことが、町名の起こりだとも伝えられています。江戸時代には、二のつく日に市（いち）がたち、にぎわいをみせました。



9　代官町（だいかんちょう）

この付近は、宇都宮城下の西端に置かれた武家屋敷町でした。江戸時代の初めに代官屋敷が置かれていたことから、代官町とよばれるようになりました。宇都宮藩の代官の数は約80人で、一つの屋敷の大きさは600 ～800坪ほどでした。明治時代の初め頃、大寛町となりました。



10 材木町

この付近は、宇都宮城の北西に位置した町人町で、特に藩の御用材を商う材木問屋が軒を並べていたことが、町名の起こりと伝えられています。町の中ほどから東の城内へ通じる道には不明門と呼ばれた木戸番所がありました。



11 材木横町

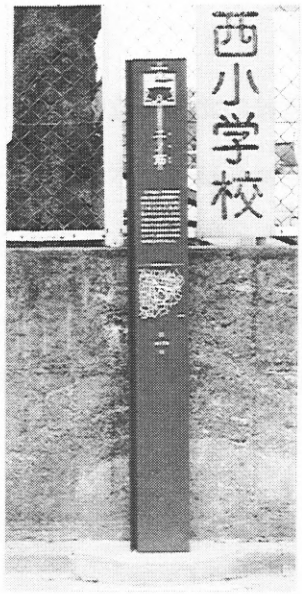
この付近は、日光街道沿いの材木町から西へ延びた町人町であったので、材木横町と呼ばれるようになったといいます。大運寺の門前町として開け、町内には傘屋・桶屋・粉挽き屋などが軒を並べていました。明治時代の初め頃、境町となりました。





12 一ノ筋

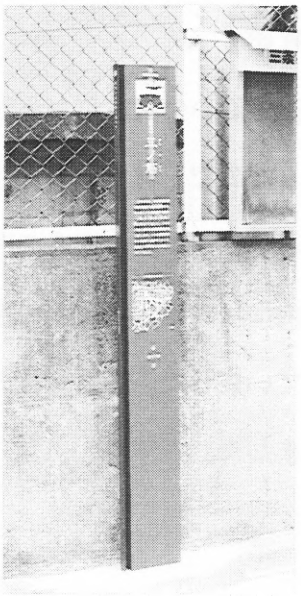
この付近は、宇都宮城外堀の西に位置する武家屋敷町で、城の近くから南北通りを順に一ノ筋・二ノ筋・三ノ筋・四ノ筋と呼んでいました。この一ノ筋には約30の武家屋敷が並んでいましたが、一つの屋敷の大きさは600～800 坪くらいで、屋敷には竹や茶の木が植えられていました。

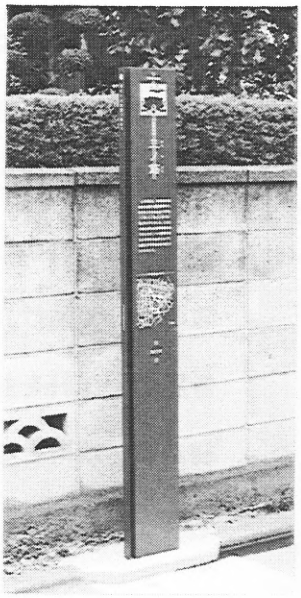




13 二ノ筋（にのすじ）

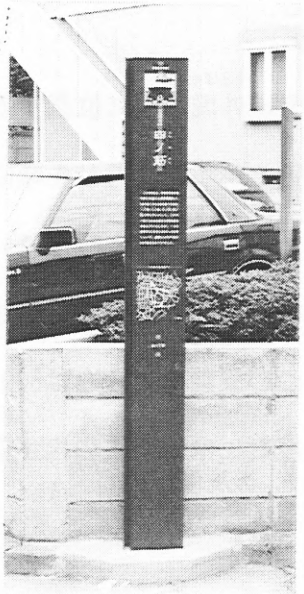
この付近は、宇都宮城外堀（そとぼり）の西に位置する武家屋敷（ぶけやしき）町で、城の近くから南北通りを順に一ノ筋（いちのすじ）・二ノ筋（にのすじ）・三ノ筋（さんのすじ）・四ノ筋（よんのすじ）と呼んでいました。この二ノ筋には、40を超える武家屋敷が並んでいましたが、一つの屋敷の大きさは600 ～800 坪くらいで、屋敷には竹や茶の木が植えられていました。

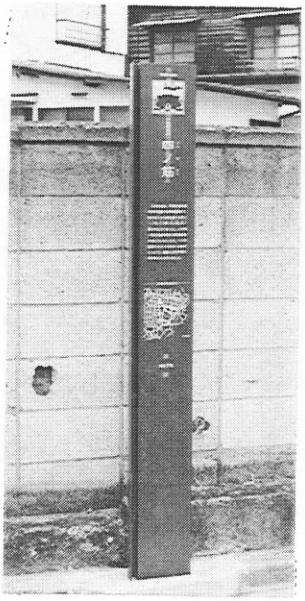




14 三ノ筋（さんのすじ）

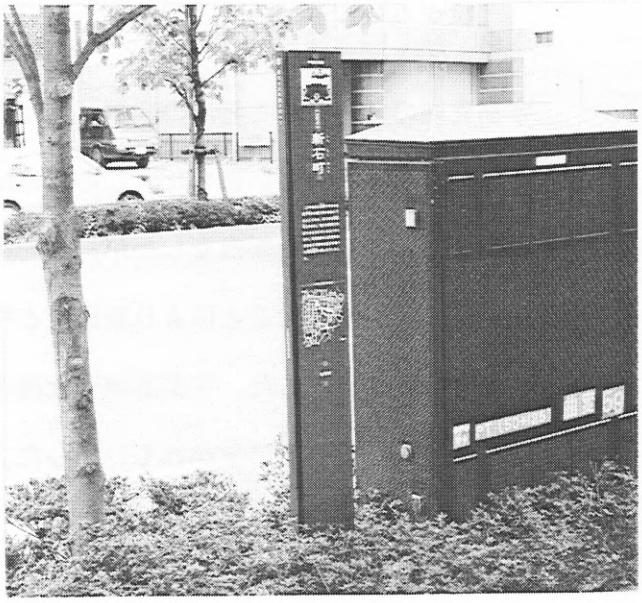
この付近は、宇都宮城外堀（そとぼり）の西に位置する武家屋敷（ぶけやしき）町で、城の近くから南北通りを順に一ノ筋（いちのすじ）・二ノ筋（にのすじ）・三ノ筋（さんのすじ）・四ノ筋（よんのすじ）と呼んでいました。この三ノ筋には約40の武家屋敷がありましたが、一つの屋敷の大きさは500 ～600 坪くらいで、屋敷には竹や茶の木が植えらていました。





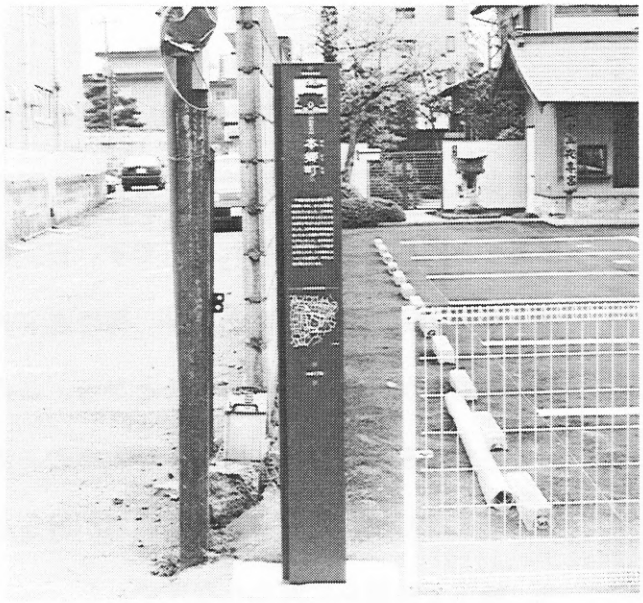
15 四ノ筋（よんのすじ）

この付近は、宇都宮城外堀（そとぼり）の西に位置する武家屋敷（ぶけやしき）町で、城の近くから南北通りを順に一ノ筋（いちのすじ）・二ノ筋（にのすじ）・三ノ筋（さんのすじ）・四ノ筋（よんのすじ）と呼んでいました。この四ノ筋には60を超える武家屋敷が並んでいましたが、一つの屋敷の大きさは300 ～400 坪くらいで、屋敷には竹や茶の木が植えられていました。



16 新石町（しんこくちょう）

この付近は、元和（げんな）5年（1619）頃下町（したまち）の米屋3軒が移転してきたことから、はじめは西石町（にしこくちょう）と呼ばれ、後に新石町と呼ばれるようになったといわれます。町の南側には日光街道を往来する荷物の重さを調べる貫目改所（かんめあらためじょ）が置かれていました。



17 本郷町（ほんごうまち）

宇都宮城の北を流れる釜川（かまがわ）の西側一帯は、古くは西原（にしはら）と呼ばれていました。この付近はその本村であったことから本郷町と呼ばれるようになりました。江戸時代は日光街道沿いに多くの商家が軒を並べにぎわいました。また町内には本郷山妙覚院（ほんごうさんみょうかいん）という寺院がありましたが、この境内にあった二十三夜尊が、今でも大切に祀られています。



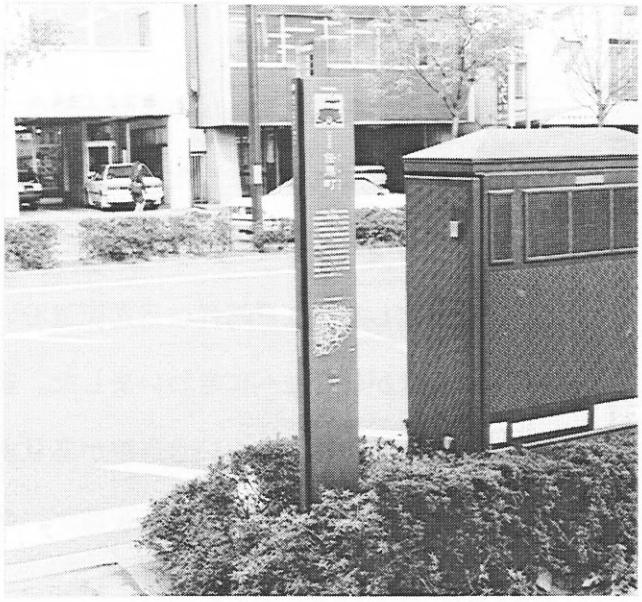
18 小幡町（おばたまち）

この付近は、宇都宮城下の北西端、日光街道の西側に位置した武家屋敷町で御旗組という武士階級が住んでいたので、小幡町（おばたまち）または小旗町（おばたまち）と呼ばれるようになりました。街道口であることから、警備の役割を果たしていたようです。



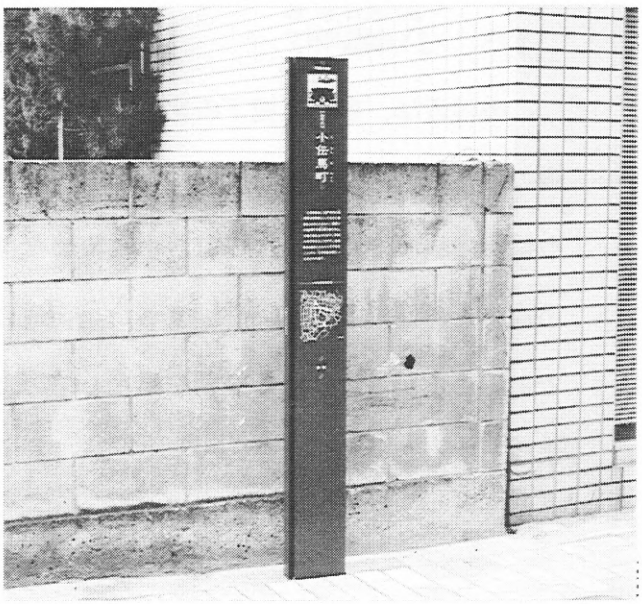
19 新田町（しんでんちょう）

宇都宮城の北を流れる釜川（かまがわ）の西側一帯は、古くは西原（にしはら）と呼ばれていました。この付近はその西原に開発された新田（しんでん）でしたが、日光街道沿いに人家が増えたことにより新田町と呼ばれるようになりました。宇都宮城下北西の交通の要所として番所（ばんしょ）が置かれていました。



20 伝馬町（でんまちょう）

この付近は、元和（げんな）５年（1619）、宇都宮城主本多正純（ほんだまさずみ）による城の大改修のときに、下町（したまち）にあった問屋場が移転された所です。日光街道と奥州街道の分岐点にあたり、荷を運ぶ人馬（伝馬（てんま））が備えられていたことから、この町の名が生まれました。町内には大名の泊まる本陣（ほんじん）をはじめ、たくさんの旅籠屋（はたごや）が軒を並べ、城下では最もにぎやかな所でした。



21 小伝馬町（こでんまちょう）

この付近は、江戸時代に伝馬町（でんまちょう）が宿場町として大きく発展したのにともない、表通りの伝馬町や池上町（いけがみちょう）で働く町人が多く住むようになり、町並みができたところです。伝馬町の発展にともなってできたことから、この町名が起こったといわれます。



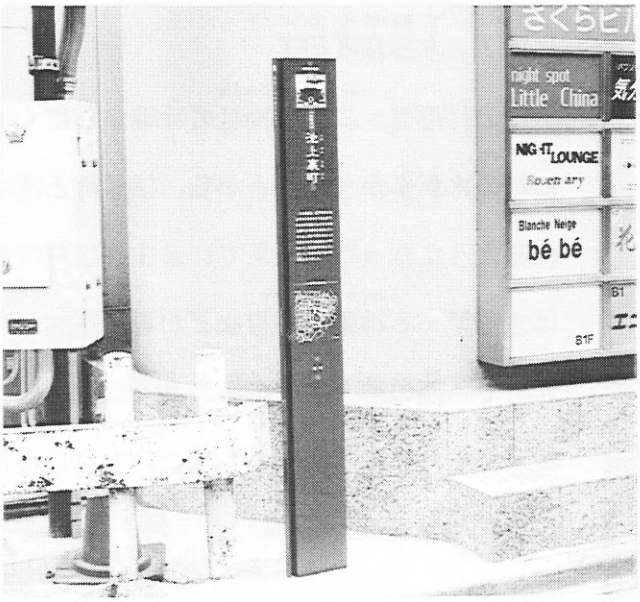
22 餌差町

この付近は、鷹の餌となる小鳥をとる餌差人が住んでいたので、餌差町と呼ばれるようになったといわれます。町内には延命院と真福寺が東西に並び、町の西側は延命院前、東側は真福寺前と呼ばれていました。明治時代の初め頃、寿町となりました。



23 池上町

宇都宮の中心部は、かつて池辺郷と呼ばれていました。この付近は、その中心地とみられ、特に鏡ケ池と呼ばれる池の上にあったことから、池上町となったといわれています。江戸時代は奥州街道沿いの町人町で、多くの商家や旅籠屋が軒を並べ、宇都宮城下の商業の中心地として大変にぎわいました。



24 池上裏町

この付近は、江戸時代に池上町から分かれてできた町で、池上町の北裏にあたるため池上裏町とか裏町と呼ばれていました。西から東に向かってなだらかに下る坂道沿いの町並みで、東は釜川に面していました。明治時代の初め頃、泉町となりました。



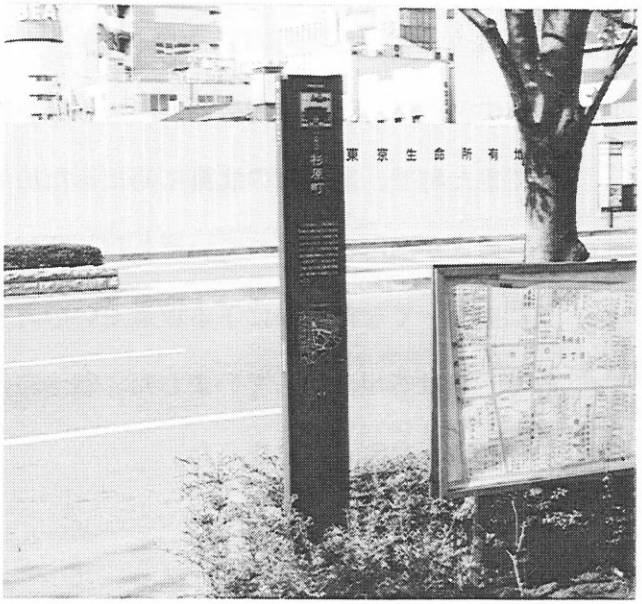
25 鼠穴（ねずみあな）

この付近は、宇都宮城外堀の北側にあたり、表通りの池上町（いけがみちょう）を通らないで広小路（ひろこうじ）から伝馬町（でんまちょう）に抜ける近道でした。この細い道がネズミの穴のように見えたことから鼠穴という名が付けられました。この通りに沿って町同心の屋敷が並んでいました。



26 江野町（えのまち）

この付近は、元和（げんな）５年（1619）、宇都宮城主本多正純（ほんだまさずみ）による町割り替えのとき、古い堀を埋めて町場にしたところといわれ、その時江戸町（えどまち）と名付けられたのが町名の起こりと伝えています。この町は、南の広小路（ひろこうじ）を抜けて城の大手門（おおてもん）へ通じる重要なところでした。



27 杉原町（すぎはらちょう）

この付近は、二荒山神社（ふたあらやまじんじゃ）の社地から続く林に杉の木が多かったことから、杉原町と呼ばれるようになったと伝えています。江戸時代は古着屋・木綿屋（もめんや）・桶屋（おけや）などが軒を並べた町（ちょう）人町（にんまち）で、西の池上橋（いけがみばし）（現・都橋（みやこばし））は城下随一の名橋といわれました。



28 鉄砲町（てっぽうちょう）

この付近は、戦国時代の終わり頃、宇都宮氏（てっぽうかじ）が鉄砲鍛冶を住まわせたことから、町名が付いたといわれています。江戸時代は奥州街道沿いの町人町（ちょうにんまち）であり、塗物師（ぬりものし）・絵師（えし）・錺物師（いものし）・表具師（ひょうぐし）・米屋（こめや）・菓子屋（かしや）など様々な職人や商人が住んでいました。



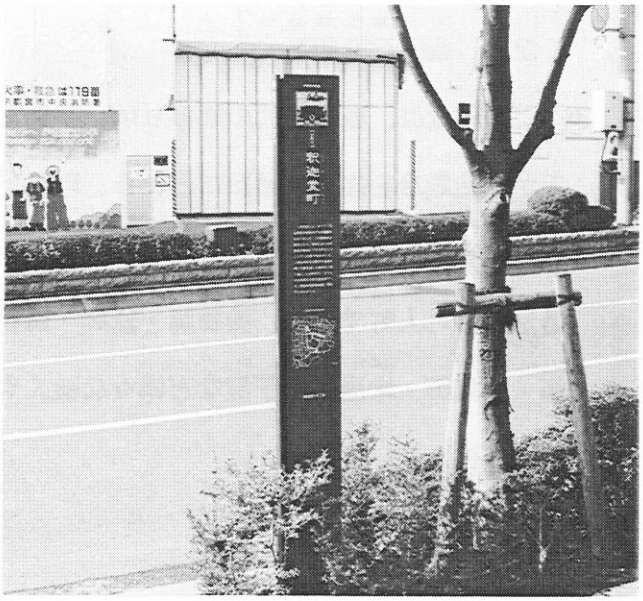
29 曲師町（まげしちょう）

この付近は、江戸時代の初め頃、檜（ひのき）や杉の薄い板を曲げて容器などを作る職人である曲（まげ）物師（ものし）が移住してきたことから、曲師町と呼ばれるようになりました。町の南側を流れる釜（かま）川（がわ）の御手洗（みたらし）は、二荒山神社（ふたあらやまじんじゃ）にお参りする人が身を清めた場所でした。



30 馬場町（ばばちょう）

この付近は、古くから二荒山神社（ふたあらやまじんじゃ）（宇都宮（うつのみや）大明神（だいみょうじん））の門前町として開けたところで、馬場先（ばさき）であったことからこの町名が付いたといわれます。かつては門前から南北の通りを馬場町、西の池上町（いけがみちょう）方面へのびる通りを西馬場（にしばば）と呼んでいましたが、後にこの西馬場を馬場町とし、元の馬場町を大明神馬場（だいみょうじんばば）と呼ぶようになりました。



31 釈迦堂町

この付近には、かつて二荒山神社の別当寺である東勝寺がありました。この東勝寺が廃寺となり、境内にあった釈迦堂の跡地にできた町ということでこの名が付きました。二荒山神社から延びる丘陵を開いて道を通した当初は、「切り通し」とも呼ばれ、ネバ土のため歩くのが大変な所でした。明治時代の初め頃、相生町となりました。



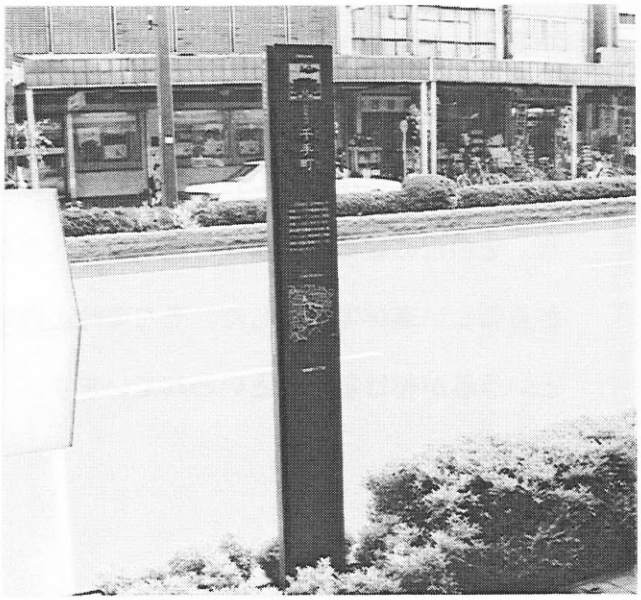
32 日野町

慶長3年（1598）、蒲生秀行が宇都宮城主になったとき、蒲生氏の出身地である近江国日野（現・滋賀県蒲生郡日野町）の商人を東勝寺の跡地に住まわせたのが、町名の起こりといわれています。この町は奥州街道に面し、荒物屋・呉服屋・小間物屋などが軒を並べていました。



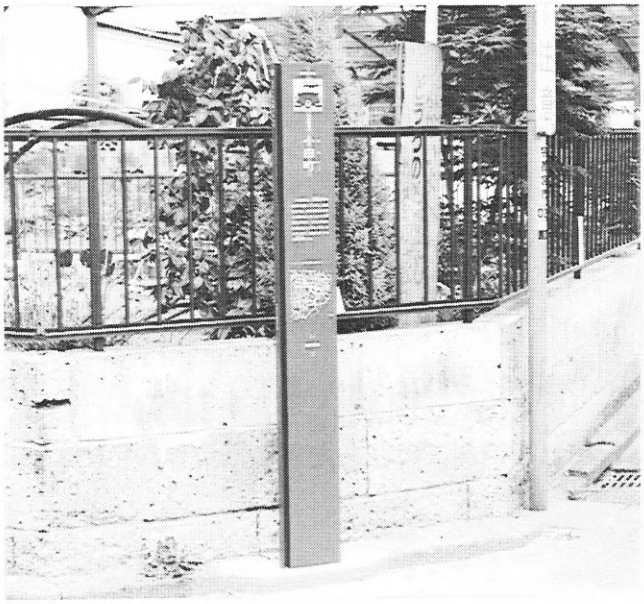
33 日野横町

この付近は、元和6年（1620）に二荒山神社から東に向かう切り通しができるまでは、日野町の方が入り口の袋小路であったため、日野横町という名がつけられ、日野町横町・日野小路町とも呼ばれていました。江戸時代の半ば頃、千手町の一部となりました。



34 千手町（せんじゅまち）

この付近は、江戸時代に千手院という千手観音像を祀（まつ）る寺院があったことから、町名が起こったといわれています。鍛冶屋（かじや）や古着屋がある細い通りでしたが、明治時代に宇都宮駅への道が整備され、にぎやかになりました。



35 小田町（おだちょう）

この付近は，二荒山神社（ふたあらやまじんじゃ）の東側に位置しています。伝説によると、神社に供える米をとる田があったことから「御田（おだ）」とよばれ，それが小田町の名の起こりとなったといわれています。東西に続く小さな町人町（ちょうにんまち）でした。



36 宮島町（みやじまちょう）

この付近は、川や沼など湿地に囲まれた島のような地形であったので、宮島町と呼ばれるようになったといわれています。町内には、古着屋（ふるぎや）・穀物屋（こくもつや）・造酒屋（つくりざかや）・荒物屋（あらものや）などが軒を並べていました。



37 今小路町（いまこうじ　まち）

宇都宮城主本多正純（ほんだ　まさずみ）が城下の町割り替えを行ったとき、奥州街道の付け替えも行いました。そのため城の北東部から奥州街道へつながる新しい道ができました。そこで今小路町という名が付けられたといわれています。



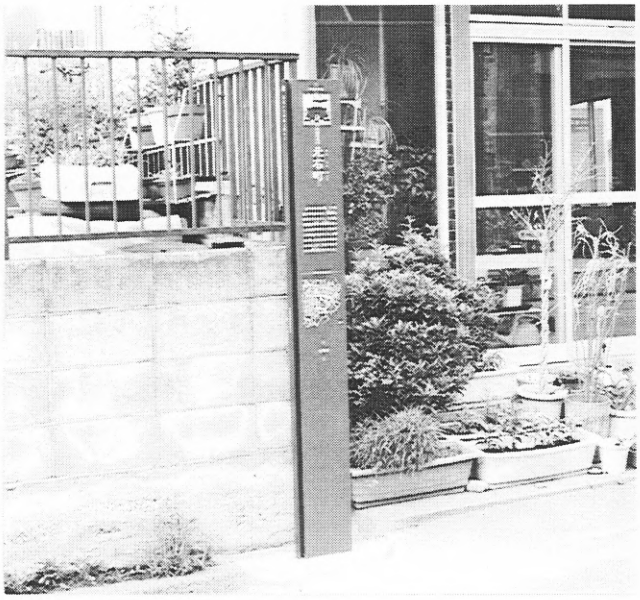
38 釼宮町（つるぎのみやまち）

この付近は，江戸時代の初め頃は藪地（やぶち）で、そこに古い剣を納める釼宮神社という祠（ほこら）がありました。その後、釼宮神社は二荒山神社（ふたあらやまじんじゃ）へ移されましたが、釼宮町という名はその祠から付けられたといいます。なお、当時奉納される刀が、現在も地元に伝えられています。



39 六軒町（ろっけんちょう）

この付近は，宇都宮城の今小路門（いまこうじ　もん）前の西側にあたり、ここに六軒の家があったことから六軒町の名が付いたといわれます。江戸時代の中頃には今小路町に含まれ、六軒町の名はなくなりました。



40 元石町（もとこくちょう）

江戸時代の初め頃、この付近に米問屋があり、東石町（ひがしこくちょう）と呼ばれていました。その後、米問屋が石町（こくちょう）や新石町（しんこくちょう）に移ったため元の石町という意味でこの町名が付きました。米問屋が移ったあと武士の屋敷となりましたが、火災で焼けてからは町人町（ちょうにんまち）となりました。



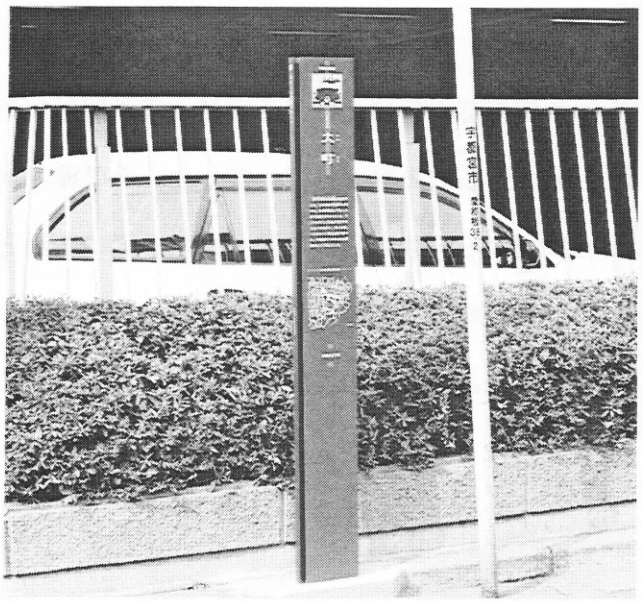
41 石町（こくちょう）

この付近は、戦国時代に宇都宮氏から穀物（こくもつ）を一手に商うことを認められていた人々が住んでいたので、石町という名が付けられました。江戸時代には穀物の売買に大きな力をもち、新石町（しんこくちょう）の穀物商人を支配していたこともあります。江戸時代後期には21軒の穀物問屋がありました。



42 肴町（さかなまち）

宇都宮城主本多正純（ほんだ まさずみ）の町割り替えにより、六軒町（ろっけんちょう）にあった魚屋を、大町（おおまち）の一部であったこの地に移したので，肴町という名がつけられました。寛永（かんえい）元年（1624）、この町の魚屋は城下の魚売買の独占権を得たので、毎年城主に塩引きの鮭（さけ）や鱈（たら）などを献上することになりました。



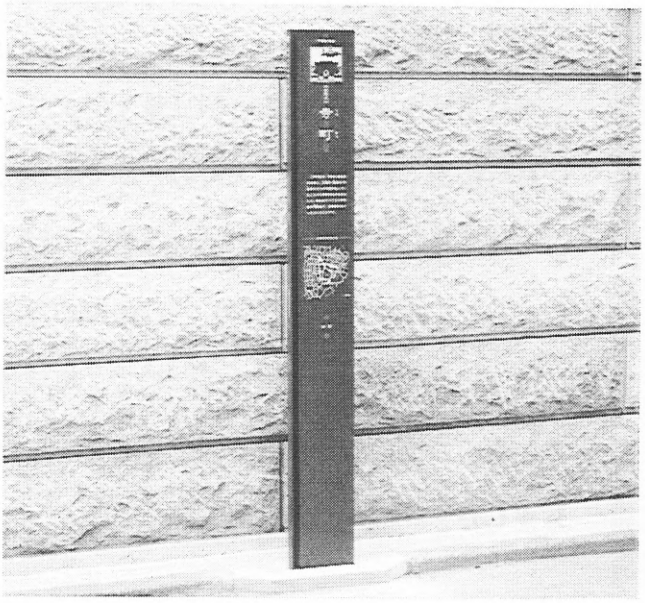
43 大町（おおまち）

奥平大膳大夫家昌（おくだいらだいぜんだゆういえまさ）が城主のとき、この付近で大膳市（だいぜんいち）が開かれ、奥州街道沿いであったので大変にぎわいました。そこで大町という名が付けられたといわれます。月に6回、一と五のつく日には市が開かれ、宇都宮城下の中心的な問屋街として栄えました。



44 大工町（だいくちょう）

宇都宮城を築くとき、この付近に大工を住まわせたことから、大工町の名が付けられたといいます。江戸時代には穀物屋（こくもつや）・干鰯屋（ほしかや）・鍛冶屋（かじや）・荒物屋（あらものや）など、いろいろな商人や職人が住んでいました。



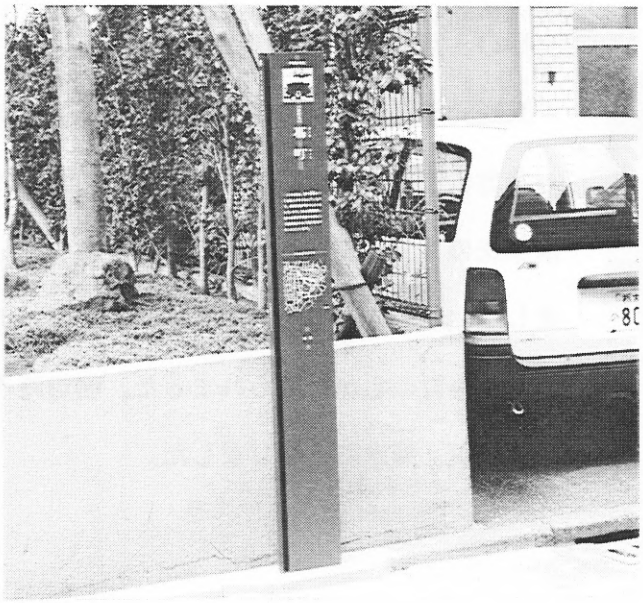
45 寺町（てらまち）

この付近は、東西に通る道の北側に、生福寺（しょうふくじ）・法華寺（ほっけじ）・妙金寺（みょうきんじ）の3つの寺院がならんでいたことから寺町の名が付きました。町内はすべて3つの寺院の門前地（もんぜんち）で、古着屋が多かったということです。



46 新宿町（しんじゅくちょう）

上河原町（かみがわらまち）で開かれていた市（いち）が大名（だいみょう）の通行にさしつかえがあったので、寛永（かんえい）11年（1634）この付近に移されました。大町（おおまち）の市に対して新しく開かれたことから、新宿町という名が付けられました。市は月に6回、三と八のつく日に開かれ、日々の暮らしに必要なものが盛んに取り引きされました。



47 扇町（おおぎちょう）

この付近は、扇や団扇（うちわ）をつくる職人が多く住んでいたので、扇町の名が付いたといわれています。昔は大変繁盛し、扇や団扇は宇都宮の名産として奥州地方にまで取り引きがあったといいます。



48 小門町（こかどちょう）

この付近は，間口の小さな家が多く並んでいたことから小門町という名が付いたといわれています。宇都宮城下の最北端に位置し、町内には、大工・萱葺（かやふ）きなどの職人が住んでいました。



49 壁町（かべちょう）

この付近は，壁をつくる職人が住んでいたので、壁町の名が付けられたといわれています。井戸水の質が良かったことから、他の町まで水を売り歩く人もいたようです。江戸時代の後期には塙田村（はなわだむら）に含まれたものと思われます。



50 清巌寺町（せいがんじまち）

天正元年（1573）、芳賀高継（はがたかつぐ）が宿郷村（しゅくごうむら）にあった念仏堂をこの地に移し、芳賀氏の本姓の清原氏（きよはらし）の「清」をとって寺の名を清巌寺としました。この寺院の門前に町並みができたので清巌寺町の名が付けられました。明治時代の初め頃、清水町（しみずちょう）となりました。



51 上河原町（かみがわらまち）

この付近は，もとは田川の河原地であったことから，その名が付けられたと思われます。奥州街道が田川を渡る所であり、上河原橋（現・幸橋（さいわいばし））がかかるまでは、徒歩や船で渡っていました。また、寛永（かんえい）11年（1634）までは市（いち）が開かれていましたが、現在も続く初市（はついち）はその名残です。



52 小袋町（こぶくろちょう）

この付近は、大きく蛇行する田川と上河原（かみがわら）町（まち）とにはさまれた半月形の袋小路になっていたので、小袋町の名が付けられました。江戸時代には、大工・車細工・紺屋（こんや）などが軒を並べていました。



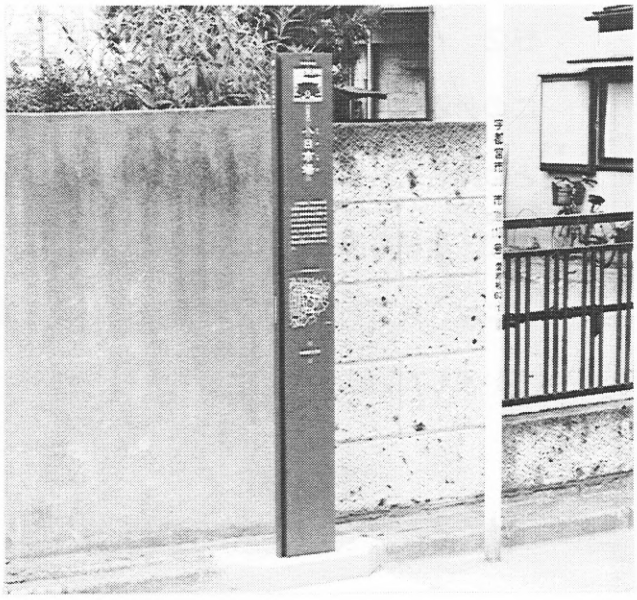
53 押切町（おしきりちょう）

この付近は、昔から田川（たがわ）の氾濫によって、しばしば土手が決壊したので、押切町と呼ばれるようになったといわれます。田川にかかる押切橋（現・旭橋（あさひばし））は、水戸・真岡方面へ向かうときの主要な橋だったため、人馬の往来が多かった所です。



54 博労町（ばくろうちょう）

この付近に、昔、腕のよい伯楽（はくらく）、つまり馬の病気を治す医師が住んでいたことから伯楽町といい、それが博労町となったといわれています。また馬喰町（ばくろうちょう）と記されたこともありました。奥州街道の出口にあたり、質屋・醤油（しょうゆ）屋・荒物屋（あらものや）などがありました。



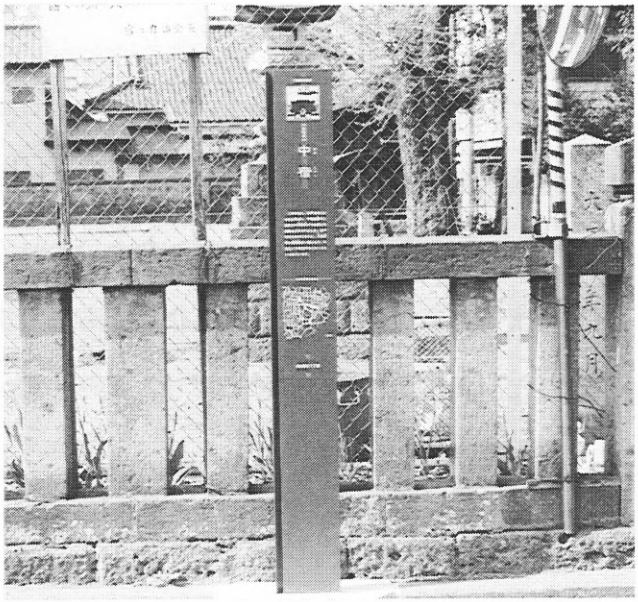
55 八日市場

この付近は、宇都宮城主本多正純が町割り替えを行ったとき、奥州街道沿いで開かれていた市をこの地に移し、八日市場の名が付いたといわれます。町の中を道場宿（茂木）街道がとおり、田川には押切橋（現・旭橋）がかかっていました。



56 紺屋町

この付近は、道場宿（茂木）街道の北側に位置し、宇都宮城下の紺屋（染物屋）がこの地に移り住んだことから、紺屋町と呼ばれるようになりました。江戸時代の後期には宿郷村の一部になりました。



57 中宿

この付近は、江戸時代には中宿と呼ばれ，宇都宮藩の上級武士の下屋敷や下級武士の屋敷などがありました。江戸時代も後半になると、八日市場や宿郷村の一部となり、中宿という地名がなくなったといわれています。



58 川向（かわむこう）

この付近は、宇都宮藩士の下屋敷（はんし　しもやしき）や足軽組屋敷（あしがるくみやしき）があり、川向侍屋敷（かわむこうさむらいやしき）と呼ばれていました。城下町からみて田川（たがわ）の反対側にあったことから、川向という名が付いたようです。正式に川向町（かわむこうちょう）と呼ばれるようになったのは、明治時代になってからのことです。



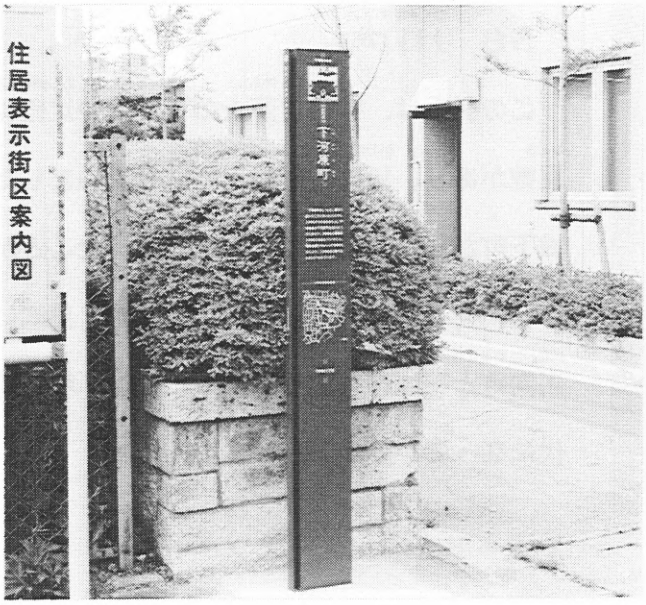
59 東新町（ひがしんまち）

この付近は、武家屋敷町（ぶけやしきまち）でしたが、ここにあった奉行人屋敷（ぶぎょうにんやしき）を移し、その跡を町家（まちや）にしたことから新しい町ができ、東新町と呼ばれようになりました。明治時代には川向町（かわむこうちょう）の一部となり、東新町の名はなくなりました。



60 猿が町（さるがちょう）

この付近は、宇都宮城下と簗瀬村（やなぜむら）との境に生まれた町であり、ここを猿が町といいました。宇都宮城の中河原門（なかがわらもん）を出て田川（たがわ）にかかる洗橋（あらいばし）と、用水路にかかる猿が橋（さるがはし）を渡ったところにあたり，ここより東は簗瀬村でした。



61 下河原町（しもがわら　まち）

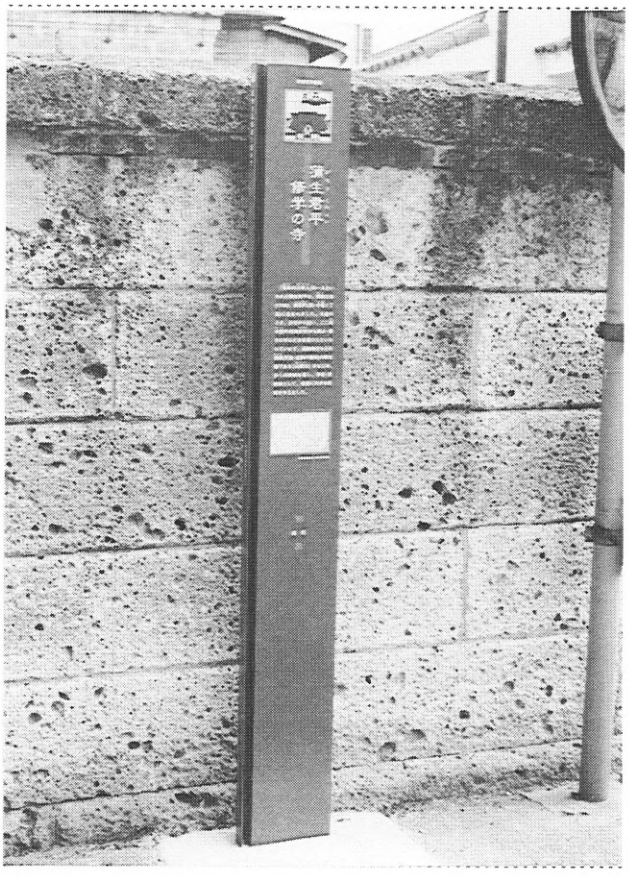
下河原町は、もと、田川に近いところにあったことから、この名がつけられました。宇宇都宮城の下河原門を出たところにあたり、武家地と簗瀬村（やなぜむら）との境に位置していました。明和（めいわ）年間（1764～1772）の洪水により、この付近に移り住んだといわれています。

名所・旧跡表示板



ア　蒲生君平生誕の地

「寛政の三奇人」の一人といわれた蒲生君平は，明和５年（1768）、ここ新石町（現・小幡１丁目）に生まれ、幼名を伊三郎といいました。13歳のころに、祖先が戦国期の武将蒲生氏郷であることを知り、「蒲生」と名のるようになりました。近畿地方などの陵墓（天皇・皇族の墓所）の研究書である『山陵志』をはじめ、多くの書物を著し、学者・思想家として、後世に大きな影響を与えました。



イ　蒲生君平修学の寺

「寛政の三奇人」の一人といわれた蒲生君平は、明和５年（1768）、新石町（現・小幡１丁目）に生まれました。６歳のとき、自宅から近い、ここ延命院の住職良快から読み・書きの手ほどきを受けたといわれています。

近畿地方などの陵墓（天皇・皇族の墓所）のの研究書である『山陵志』をはじめ、多くのの書物を著し、学者・思想家として、後世に大きな影響を与えました。



ウ　蒲生君平の墓

ここ桂林寺には、「寛政の三奇人」の一人といわれた蒲生君平の墓があります。蒲生君平は、明和５年（1768）、新石町（現・小幡１丁目）に生まれました。近畿地方などの陵墓（天皇・皇族の墓所）の研究書である『山陵志』をはじめ、多くの書物を著し、後世に大きな影響を与えました。文化10年（1813）江戸で死去し、谷中（現・東京都文京区）の臨江寺に葬られ、後にここに分葬されました。



エ　修道館跡

この付近には，安政５年（1858）に設けられた修道館がありました。文化年間（1804～1818）に開かれた宇都宮藩の藩校を、幕末の藩政改革によって充実させたものです。藩士の子弟に古典・武芸などを教えるとともに、一部には洋学の教育を取り入れました。明治４年（1871）の廃藩置県により閉校となりました。



オ　材木町木戸跡

ここには、町人の住んだ材木町から武家の屋敷へと通じる門があり、材木町木戸とよばれていました。代官町（現・大寛町）に住む武士が、城内に通う朝晩だけ門が開き、日中は閉じていたことから、不明門ともよばれていました。



カ　日光街道と奥州街道の追分

江戸からの街道は、ここで日光街道と奥州街道に分かれました。北へ向かう清住町通りが日光街道、東へ向かう大通りが奥州街道にあたり、多くの人馬で賑わった場所でした。



キ　高札場跡

ここには、江戸時代に高札場がありました。高札場には、人々が従わなくてはならないお触れや、きまりごとなどを書いた木の札（高札）が立てられていました。宇都宮藩内の村々にも同様な高札場がありました。



ク　張番木戸跡

ここには、江戸時代に張番木戸がありました。奥州街道（現・大通り）から宇都宮城の大手門に向かうには、最初に通らなければならない木戸でした。この木戸を南に入ったところに、役人の詰める番所があり、人々の通行を監視していました。



ケ　鏡ケ池

昔、この辺りに池があり、その池から出てきた鏡を二荒山神社に奉納したことから、鏡ケ池と呼ばれるようになったといわれています。また、池から出た鏡は、静御前が落としたものだという伝説があります。宇都宮の古い名である池辺郷は、この池を含む広い湿地に由来するという説もあります。



コ　御橋

ここには、釜川を渡るための橋が架けられ、御橋と呼ばれていました。この橋は、宇都宮城主が大手門から二荒山神社に参拝するときに渡ったといわれ、元和５年（1619）、本多正純が大手門を江野町に移してからは、一般の人も渡れるようになったと伝えられています。



サ　百間堀跡（ひゃっけんぼりあと）

この辺りには、宇都宮城三の丸を守る百間堀がありました。幅24間（約43m）、深さ3間2尺（約6ｍ）、北は三の丸の太鼓門から南は宇田門まで、およそ100 間（約180 ｍ）あったので、この名が付けられました。「大いちょう」（市指定天然記念物）は、この堀の内側の土塁上に立っていると考えられます。



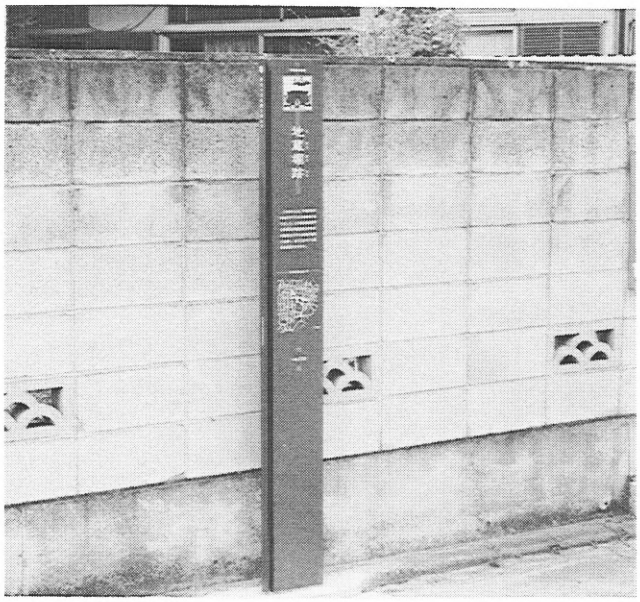
シ　西館堀跡（にしだてぼりあと）

この辺りには，宇都宮城の西の守りである西館堀がありました。この堀は宇田門から西館門にかけて続き，幅は23間（約41ｍ）であったと記録されています。堀の内側には御普請小舎がありました。



ス　南館堀跡（みなみだてぼりあと）

この辺りには，宇都宮城の南の守りである南館堀がありました。この堀の幅は10間（約18m）であったと記録されています。堀の内側には武士の屋敷が建ち並んでいました。



セ　地蔵堀跡

この辺りには、宇都宮城の南の守りである地蔵堀がありました。この堀は地蔵堂門と英厳寺（宇都宮城主戸田氏の墓所）をむすぶ道路の南側に位置し、近くには今でも延命地蔵堂があります。



ソ　上蓮池跡

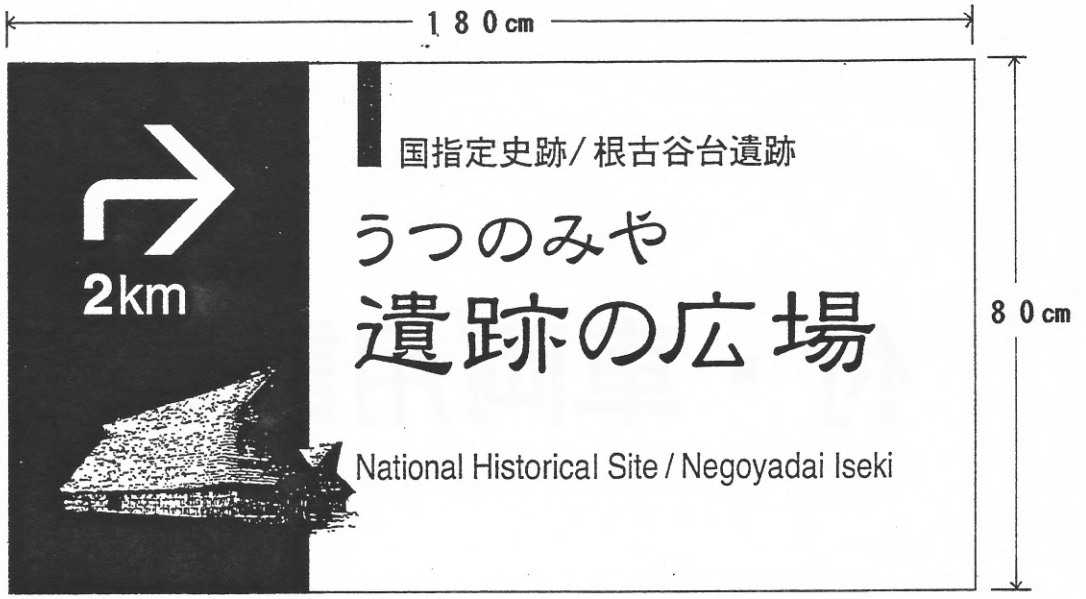
この辺りには、宇都宮城の東側を守る堀である上蓮池がありました。この池は幅が30間（約54m）で、内側には石垣が積まれていました。宇都宮城の堀で石垣があったのは、この付近だけといわれています。



タ　下蓮池跡

この辺りには，宇都宮城の南東を守る堀のである下蓮池がありました。この池は、宇都宮城を囲む堀としては最も外側にあり、近くにあった門や石垣、上蓮池とともに城の守りを固めていました。

付・車両用誘導板



（根古谷台遺跡用）

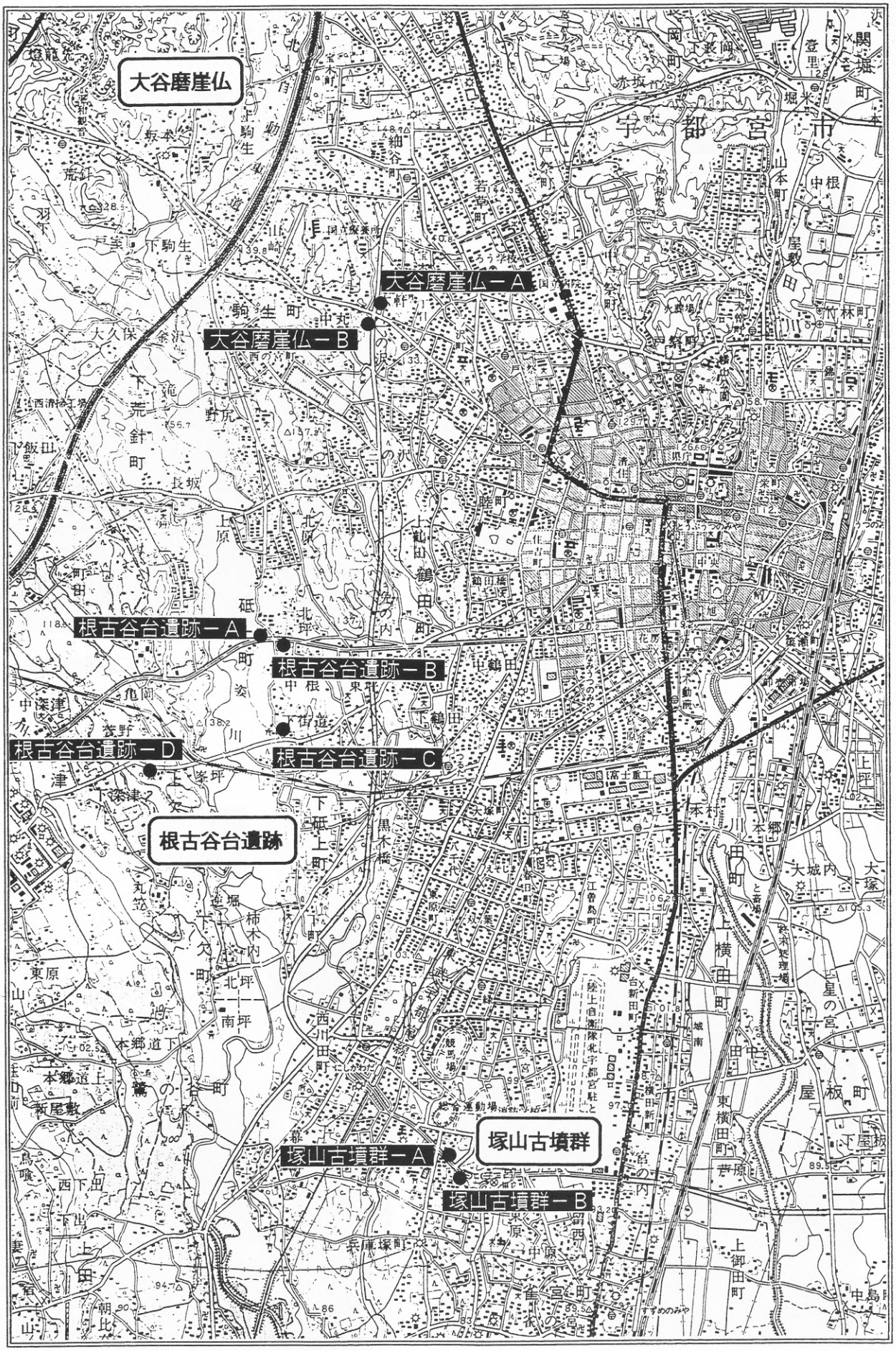


（大谷磨崖仏用）



（塚山古墳群用）

車両用誘導板のデザイン


大谷磨崖仏
大谷磨崖仏－A
大谷磨崖仏－B
根古谷台遺跡－A
根古谷台遺跡－B
根古谷台遺跡－C
根古谷台遺跡－D
根古谷台遺跡
塚山古墳群
塚山古墳群－A
塚山古墳群－B

車両用誘導板設置箇所



根古谷台遺跡－A



根古谷台遺跡－B



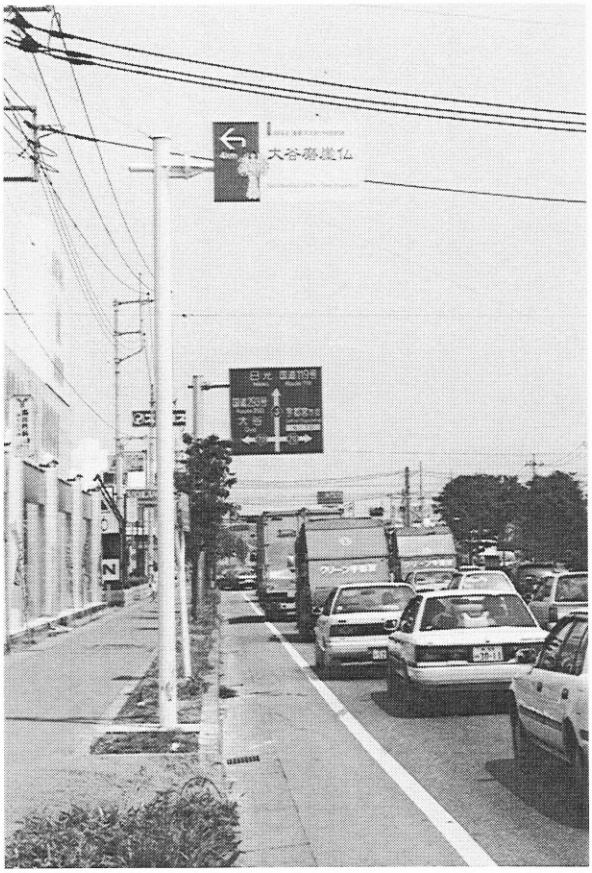
根古谷台遺跡－C



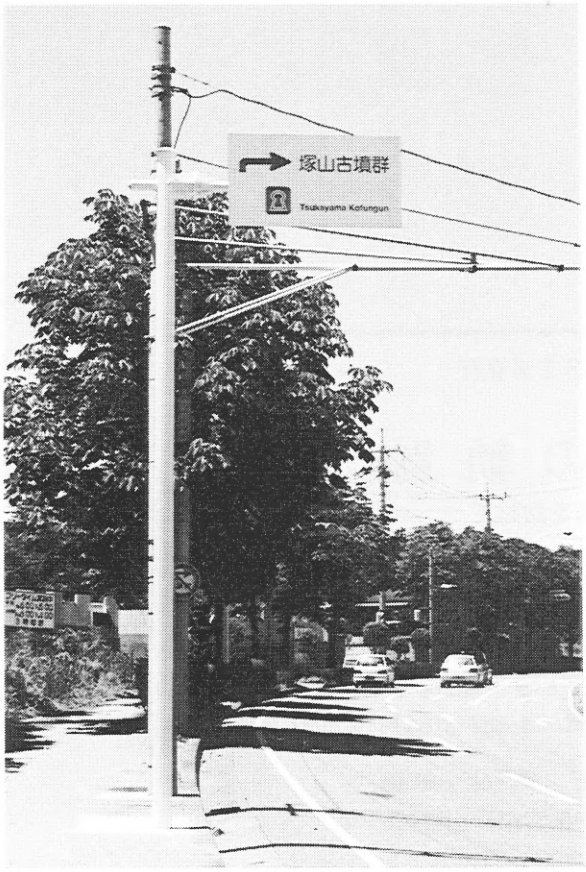
根古谷台遺跡－D



大谷磨崖仏－A



大谷磨崖仏－B



塚山古墳群－A



塚山古墳群－B

平成８年３月３１日発行

宇都宮の軌跡

――城下町宇都宮を訪ねて――

発　行　宇都宮市教育委員会

編　集　宇都宮市教育委員会文化課
（〒320　宇都宮市旭1-1-5
TEL028-632-2764）

印刷所　㈱松井ピ・テ・オ・印刷
（〒321 宇都宮市平出町4287-7
TEL028-662-2511）